



ア  
メ  
リ  
カ  
童  
話  
か  
ら  
  
9

松 原 至 大

## 子熊こくまのスター

ここは丸太小屋です。お臺所から食器を並べる音が聞こえてきたので、ピリー君はベットからとび出しました。急いでシャツを着ていますと、お母さんがドアのところにおいでになりました。

「ぼく、すぐ、支度をします、お母さん。」と、ピリー君は言いました。

今日は、黒いちごをとりに行く、うれしい日でした。ピリー君は、朝の森のにおりが好きでした。雪を頂いた山から、鑛山くわんざんで働く人たちのキャンプのあたりに吹きおろしてくるすがすがしい空気が好きなのでした。ピリー君は、生れながらのアラスカ人といわれる、ほんとうの「ソードー」でした。アラスカは、北アメリカの西北にある半島で、「ソードー」というのは「山の子」というてよいのでしよう。

「ゆうべのあらしの後ですから、行けましようかねえ？」と、お母さんは心配の御様子でした。「森はぬれているし黒いちごは、だいなしになつていますよ。」

「あらしつて？」と、ピリー君はお聞きするのでした。

「まあ、と、お母さんはあきれていらつしやいます。「あなた、御存じなかつたの。よく寝こんでいらしつたのね。」

ゆうべ、あんなに雨と風とが、ひどかつたのに。お母さんは、この小屋が吹きとばされると思いましたよ。」  
ピリー君は、窓にかけよつて、太陽が輝いでいる外をながめました。

「お母さん、でかけましょうよ。とてもよいお天気ですよ。」

お母さんは、あまりすすみませんでした。でも、こうおつしやいました。「いいわ。けど、急ぎましょうね。」

二人は、朝のお食事を急いでから、ピリー君は食器洗いのお手傳いをいたしました。それからピクニック・ランチを用意して、なれた黒いちこの畑へ出かけました。ところが、あらしはどこともかしこも荒していました。二人は倒れた丸太の上や、折れた枝の上を、ころばないように歩きました。

畑にくると、間もなく忙しくなりました。金の桶がぼんぼんと音を立てて、黒いちごが盛にとびこみました。どれも大きくふくらんで、眞黒で、ぬれた葉の間に、おいしそうに實つていました。

「とてもおいしそうだな。お日さまのような味だよ。」と、ピリー君は夢中でした。

その時、突然に二人は、聞きなれない音を耳にしました。うなるようなまさやきで、向うがわのやぶの中から聞こえてくるのでした。

「まあ、一體、なんでしよう？」と、お母さんはおつしやいます。

「行つて、見ましょうよ。」と、ピリー君が答えます。

二人は氣をつけて、やぶの向うがわにまわりました。そこには、道を續ぎつて、根元から倒れた一本の松の木の下敷きになつて、一びきのお母さん熊が死んでいました。そしてその側に、お腹のすいた一匹の小さな子熊がいました。

子熊は、ピリー君とお母さんを見ますと、齒をむいて、逃げようとした。けれど、まだ足がよちよちしていて思うように歩けないものですから、わけなく捕えられました。お母さんは、いちこの桶に、子熊をしぼつた綱を結わえて、ピリー君に渡しました。

「ピリーちゃん、あなた、それをどうなさるつもり？」と、お母さんはおつしやいました。

「ぼく、お家へ連れてつて、飼つてやりたいな。」と、答えました。「生きた得物を持つて歸る探險家のような氣がしますよ、お母さん。」ピリー君の胸はおどつています。

「まあ、大へん。大きくなつたら、こわくなると思わないの？」と、お母さんは、つくづくと子熊を見ていらつしや

います。

「ほく、當分お父さんにお願ひしてあすかつて頂きます。いつしよに遊んで、馴らせたら面白いなあ。」

そこでピリー君は、お母さんに手傳つて頂いて、子熊を無事に丸太小屋のお家に連れてきました。ピリー君は、うれしくなりません。仲よしができたからであります。この子熊は、頭の上に五つの白いぼちぼちがありました。それで、スター（星のことですね。）と名をつけました。

スターは、とてもお腹がすいていました。夕飯の時には、ピリー君が幾年か前に使つたことのあるびんから、ミルクをごくんごくんとお飲みました。

「ピリーちゃん、この子熊が、ほんとうにあなたに馴れたら、どんなに楽しみでしょうね。」と、ある日のこと、お母さんがおつしやいました。

「こいつ、ぼくが好きですよ。だから、じきに馴らせませすよ。」と、ピリー君は得意で答えました。

ちようどその時、スターがはいてきて、ピリー君の膝の上に足をのせました。この子熊は、利口な性質でした。いつもうれしそうな顔をして、ピリー君の顔を見ました。

「こいつめ。」と、ピリー君がにらみました。「つめが鋭くなつたな。よし、教えてやるぞ。」

ピリー君は布切れを見つけて、猫にするように、つめをかくすことを覚えるまで、スターの足を包んでおきました。ピリー君は、スターのために、小さなテーブルといすを作つて、食事時になると、なにか食べるものを、だれかが持つてきてくれるまで、じつとひとり待つているようにしつけようとしました。時には、同じテーブルについて、いつしよに食べることもありました。スターはこれ喜んで、身體を動かしてました。

ピリー君とスターは、かくれんぼやそのほかいろいろな遊びをしました。スターが、この小さな主人公の倍ぐらいも、身の丈がのびたのは、それから間もないことでした。ピリー君について、スターがキャンブのあたりを散歩する姿は、まことに面白いながめでした。

ある夕方のこと、ピリー君が魚釣りからもどつてくると、見なれない人がお父さん、お母さんたちと夕食を食べていました。

「これが、お話した私のせがれと、熊ですよ。」と、お父さんがおつしやいました。「ピリーや、この方はヒリーさん

とおつしやつて、獵リョウにいらつしやつたのだよ。ヒリーさんは、合衆國の方に、サーカスを持つていらつしやるので、スターを買いたいとおつしやるのだよ。」

「スターを？」と、ピリー君はおどろいて聞き返えしました。

「そうよ。スターはもう大きくなりすぎて、あなたのお友だちにはなれませんよ。これ以上育つと、野獸ですからあぶなくなります。」と、お母さんはおつしやいます。

「ピリーや、ヒリーさんに藝當ゲイヂョウをお目かけなさい。」と、お父さんはおつしやいます。

ピリー君は、涙を浮べて、お父さんたちの言葉に従いました。珍らしそうにしている人の前で、スターを檻ケの中に入れてようなどは、考えるだけでも悲しいことでした。檻などに入れたら、きつとスターは、死んでしまうでしょう。スターは、ピリー君と同じように、森の中が好きです。風が好きです。太陽が好きです。

「これは、すばらしい動物ですね。高い値で、頂きましょう。」と、ヒリーさんは言いました。「明日の晩までに、すっかり連れて行く用意をしておいて下さい。この十五日に合衆國に歸る船にのるつもりですから。」

「支度をおこな、ピリー。」と言つて、お父さんはほおえみしました。

この時、スターがはいつてきて、手をピリー君の膝の上にせましました。ピリー君は、スターに腕をかけて、眼に浮んだ涙をかくそうとしました。スターは、鼻をすすりました。

「わかるのだね。」と、ピリー君は思いました。「ぼくの言うことが、よくわかるのだ。」

その夜は、ピリー君は眼することもできませんでした。スターが、裏庭を歩いているのが聞こえました。ピリー君は出て行つて、話したくなりました。やつとのこと目がふさがつたのは、夜明け近くのことでした。

あくる朝、食事におりて行きますと、お母さんが「スターは、どこにいるの？」と、お聞きになりました。

「ああ、どこか、そこいらにいますよ。」と、ピリー君は冷めたく答えました。

けれど、おひるになつても、スターの姿は見えません。やがて、夕方となりました。ヒリーさんが來ました。けれど、スターの姿は、まだ見えません。みんなでスターの名を呼びながら、そこら中を探しました。でも、返事がありません。とうとうヒリーさんは、がっかりした上に、御きげんを悪くして歸つてしまいました。とうとうスターは、歸つてきませんでした。でも、ピリー君には、それがう

れしいのでした。あのスターが、この森から、この美しいアラスカの空の下から、消えてしまうなどは考えられなかつたからです。

「ぼく、二度とスターに會えるかどうかわからない。」と、ピリー君は悲しそうに言いました。「でも、どんなことがおこつてるのか、スターは知つていたんだよ。」

それを聞いて、お母さんはお笑いになつて、そんなことはありませんよとおつしやいました。けれど、ピリー君はスターがほかの熊とちがつていて、なんでもよくわかることを信じていました。そして、いつかはきつと、二度と會えるものと思ひました。

それから、長い月日が立ちました。ピリー君は、まくなつて、學校へ入るために、合衆國へ行くこととなりました。いよいよ出發する前の日に、お別れの魚釣りに行きました。

川が、入江になつたところを、ピリー君が靜かにボートにのつて漕いでいますと、釣りをしているのは、自分だけでないことを知りました。

長いヒマラヤ杉の丸太が、水の中に突き出た上に、お父さん熊と、お母さん熊がすわつて、釣りをしていました。堤の上では、二匹の子熊が遊んでいました。この親熊は、ピリー君に氣がつかないほどの熱心さで、水の流れを見ました。

突然、すばらしい早さで、お父さん熊が、水の中に手を突つこんで、銀色に光る魚をつかみ出しました。お父さん熊は、自慢そうに頭をあげて、お母さん熊を見てから、初めてピリー君の方を見ました。

その熊の額のところには、白い星がありました。

「あつ、スターだ、スターだ。」と、おどる胸をしづめて、ピリー君は呼びました。

スターは、じつとしていました。お母さん熊と子供たちは、びつくりして、姿を消しました。その中に、スターも子供たちの後を追つて、丸太のところを離れて、森の中に靜かに消えてしまいました。

ピリー君は、お家の方へボートを漕いで行きました。楽しそうに、笑いながら、今はもうスターが、お父さんになつてしまつて、森の毎日の生活に満足をしていることが、よくわかつたからであります。

(マーガレット・サンダー女史の作による)